神金公民館だより

第１５１号
２０２２年
１０月１日

猛暑の夏から解放され，朝夕には秋の気配を感じる季節となってきましたが，日中にはまだまだ暑さを感じる日が続いています。

そんな暑さの中，道ばたに目をやると，コスモスが咲き乱れ，ススキが穂を広げ，秋の風景がここかしこに見られるようになってきました。いつものような神金の秋の風景がやってきてはいるのですが，三年目となったコロナ禍の秋となり，県内の新規感染者数は三桁になったままとなっています。

そのため，秋の様々な行事やイベントが中止となったり，縮小して実施されることになっています。

すっかり定着した「新しい生活様式」を確実に実践しながら，免疫力を高め，感染を予防していくことで，元気に秋を満喫していければと願っています。

新規感染者数が減少してきてはいますが，高止まり傾向にあるようです。

感染防止のための取り組みとして，公民館使用時には，名簿に参加者名を記入するとともに，検温結果の記入をお願いします。

また，マスクを着用し密集にならないようにし，換気を行いながら使用してください。

万が一，公民館利用者の中から感染者が発生した場合は，連絡をお願いいたします。

神金トピックス＆ニュース

県優良老人クラブ表彰

９月１４日，山梨県老人福祉大会が，甲府市総合市民会館で開催されました。この会は，県内で活動する老人クラブの発展などを目的に山梨県と県老人クラブ連合会が開いたものです。

この大会において，老人福祉の増進に大きく貢献した団体として，神金地区老人クラブ連合会が優良老人クラブとして表彰されました。

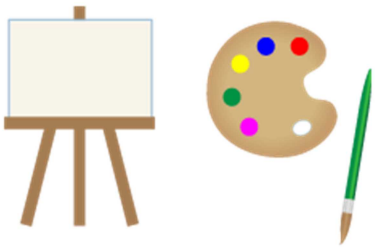
第11回県知事杯ゲートボール大会

９月３日，都留市小形山大輪スポーツ広場で開催された大会において甲州神金として参加した神金チームは，三回戦で惜敗し４位入賞となりました。

予選リーグでは，選手全員が自分の役割をはたし危なげなく決勝トーナメントに進み，一・二回戦と強豪チームを相手に勝ち進みました。

◇神金文化祭展示作品の募集◇

１１月１日～５日に開催予定の神金文化祭の展示作品を募集しています。写真や絵画，書道作品，生け花などを展示予定です。地区内の方々の様々な作品を展示していきたいので，ご協力をお願いいたします。



神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が，神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

令和になった今，神金で生きる者にとって，この地で生活した人々の足跡を鮮やかに蘇らせ，知恵や遺産・心意気を学び，心の大きな後ろ盾や糧になればと願います。

道　三

神金で最も主要の道路に青梅街道がある。この道は酒折を起点として東京都の青梅市を終点とした道であるが、現在は立川市を経て新宿までを青梅街道と言っている。東京方面に行く道に、昔から萩原口（大菩薩越え）があったが急坂で交通が不便なため、神金、大藤、七里、日下部、万力、平等、丹波山村の七ヶ村にて協議の上、時の県令藤村紫郎に陳情した結果明治八年二月認可になり、直ちに差出の磯の岩石の切り下げ工事にかかったが僅か百米位の工事に１ヶ年余の工期を費やしたそうである。

大藤、神金地内は旧道を利用せず農地を潰し放題の設計による道路である。筆者の幼い頃は、まだ新街道を新道と言い、旧街道を古道と言っていた。旧道で現在残っているのは小田原橋の上の自動車工場の前から下河原の矢崎一恵さんの裏まで約一粁の道が昔の面影を残している。街道中、昔と状況が変わっているのは、裂石の祝橋（黒門橋）から桜橋まで真直の道であったが明治四十年の水害で一部が流出したので右に迂回し黒門の前に出たのが現在の道である。

五郎田から葡萄沢口までは黒川金山への物資の輸送路としてあったが、宝永二年（１７０６）甲斐十五萬石の国主になった柳沢吉保は、以前から一之瀬高橋の金を採掘するために、新たに柳沢峠を越え藤尾までをその子吉里につくらせた。そのころ街道（古道）の改修と萩原口留番所（番屋）の改築をしたことが古文書に残されている。柳沢侯の徳を頌え、峠の名前を今も柳沢峠と言っている。従って落合部落は宝永年間以後の部落であって、一之瀬高橋に比べ歴史は新しいものである。道は藤尾から落合川を渡り奥多摩の渓流に沿って下ったが、非常に難工事だったにもかかわらず労賃が安かったので働く人足がなく、甲府監獄の囚人を使って働かせたそうである。逃亡を防ぐため両足を鎖でつなぎ鉄砲を持った番人が見張っていたそうである。その囚人達のために小屋を建て食事や寝起きをさせた小屋跡が一番小屋から三番小屋まで今も残っている。二番小屋跡は筆者の所有地であるが、泉水谷と多摩川の合流点にあり三条橋を渡ってすぐ右下の場所である。この話は祖父から聞いたものだが、青梅街道の哀史である。

＊次ページに続く

神金の歴史

神金から丹波山村まで特に難工事で、完成するまで三ヶ年の歳月を費やし死傷者も多数あったそうである。道路の幅は二間二尺（五米弱）で山道は狭かった。全長は約三十粁、その内二十粁は新道である。橋の数は差出の亀甲橋をはじめ二十八、総経費三萬二千八百円、その内県費補助は八千二百円のみ。差額の二萬四千六百円は関係七ケ村と篤志家の寄付によったものである。住民も僅かな賃金で働いたそうである。特に小田原筋の住民は割当てによって働かされた文書が残っている。特に道路に協力した大には「其の方儀二等道路青梅街道開鑿に協力したことは誠に奇特に付き褒置山梨県」と便箋位の大きさに書かれた表彰状がある。昔の人はこの紙切れを戴いてよほど有難かったようである。

千野橋から上は道のないところに道をつくったが土地は無償寄付であった。青梅街道開鑿による潰地は五町四反九畝歩にて県令のご威光と村役人の指導宜しきを得て温和しく寄付したが、北都留郡富浜村では藤村県令の強引な土地収用に対して、農民の反対運動が起こり、内務省に直訴した事件があった。明治十三年六月に明治天皇は四百人のお供を連れて山梨県にご巡幸なされたが、神奈川県より道路がよいと褒められた由である。その陰には藤村県令の独断専行の諸行政に対し不満と怒磋の声がもり上がり、いくつかの事件が現実となってあらわれた。然し殖産興業の実績は多大であり、地域住民は現在も青梅街道の恩恵を受けている。

馬の背で運ぶ時代から自動車の時代になったので、山梨県は東京都に対し本県内（一之瀬高橋）に五千六百三町歩の都有林のあることを理由として丹波山村から柳沢峠までの約十六粁の新道路の開鑿要請したところ、東京都も水源涵養林の木材の搬出等を考慮して承諾したので、昭和十五年より五ヶ年計画にて昭和二十年には完成するよう双方協議の上決定したので、県では四十七萬円の予算にて五郎田から柳沢峠まで巾四米五十糎、延長約八粁を着工したが、大東亜戦争のため中止となり、終戦後二十二年に再び着工したが設計変更もあり竣工は昭和三十一年であった。東京都は多摩川の北側の岸壁を切り崩す難工事であったが、約束通り三十年に完成した。

現在青梅街道は主要地方道として重要視され、国の助成を得て年毎に整備され、遠からず国道となることでしょう。今この道を通行する人すべての人が利便の恩恵を受けており先人の努力に感謝しているが、この道には工事中死傷された人々や強制割当てで連日出労した人々、鎖で足を繋がれて働いた囚人達、無条件にて土地を献納した人々等封建社会の弱い人々の血と汗と涙が注がれていることを忘れずに心してこの道を歩みたいものである。